



1. 被爆したときのことをお聞かせください。被爆時、年齢が幼くて当時の記憶がない方(被爆二・三世の方)は自分が被爆者(被爆二・三世)であることを、いつ、どのようにして知りましたか。
3. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

日野市に住んでおります片山昇(かたやまのぼる)と言います。昭和7年生まれですから、81歳になります。13歳で被爆いたしました。

今、日野市にも70人ほどの広島、長崎の被爆者が生きておりまして、30年前から日友会(にちゆうかい)という被爆者の会をつくっております、今、その会長をしております。もう、両足を棺桶に突っ込んだような男ですけれども、みなさんに昔話ではなくて、現代につながる話として、受けとめてもらえればありがたいです。

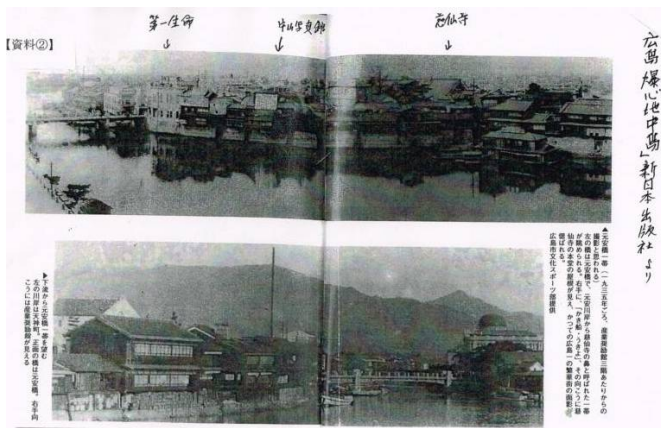
はじめに、被爆者の証言というのはひとりひとり全部違うんです。ですからできるだけ多くの被爆者の証言を聞いていただいて、69年前の話なんです、みなさんの柔かい頭の中で、想像力で蘇らせていただければと思って、下手な語り手なんです、頑張りたいと思います。よろしくお願いたします。

私は今の平和公園、爆心地に佐々木禎子さんの“原爆の子”の像がありますね、あの辺りで生まれ育ちました。こう証言をしますと、公園の上に原爆が落とされてよかったですね、という人も多いいんです。



今日はみなさんに中島の爆心地がどんな街だったのかイメージしていただきたいと思います。このイルミネーションに輝いているのが今の原爆ドームです。当時の産業奨励館で、この時は何かイベントをやっていたのだと思います。我々が小さいときは陳列館と呼んでいまして、あまり親しみのある建物ではありませんでした。この写真は産業奨励館ができて10年くらいたった大正時代末期の写真です。当時の人間は元安川の川風をあびながらビールを飲んでいたという写真ですが、私の家は片山写真館という写真屋でした。

これは【資料②】原爆ドームから爆心地を見た写真ですが、写真右端に屋根が明り取りのガラスになっているのが私の家でした。中島町は江戸時代から明治、大正の頃まで広島を中心部でした。寺も11ありまして、県庁、県病院、日銀の広島支店も



この地区にありました。封切り映画館も2つありまして、広島駅の方に中心が移りつつある中でも、原爆が落とされたときは繁華街の一つで、なに不自由なく過ごすことが出来た街でした。

片山写真館は、祖父が東京で修業しまして明治17年に中島で開業しました。明治27年の日清戦争のときには広島に置かれた大本営の指定写真館にもなりました。親父は二代目で昭和15年、原爆を落とされる6年前まで写真屋をやっております、広島市と広島県の写真師会長をやっていましたが、腎臓結石で倒れまして、昭和14年に廃業いたしました。私も中島で過ごしたのは小学校1、2年の頃までで、父の廃業で爆心地から800m離れた下中町に移りました。ここも原爆の時にいたのなら助からない距離です。ところが、今は平和大通りになっていますが、あれは戦争中に東西に幅100mの防火地帯をつくるということで、それにひっかかりまして、「一週間以内に立ち退け」と追い出されて、爆心地から2200mくらいの段原新町に移ったんです。

私は小学校6年生の秋、昭和19年、原爆が落とされる前の年に結核性の脳膜炎という病気をしまして聴力を失いました。それで1年落第するんです。友達は勇んで中学校一年、女学校一年に進学してしまいまして、私だけが取り残されました。それが友達との生死を分けてしまいました。神ならぬ身の夢にも思ぬことでした。

私は段原国民学校で被爆したんですけれど、日曜日は休みでしたけれど当時は夏休みはなくて、6日も学校に行っておりました。当時は子どもは邪魔になるということで集団疎開ということをやっております、田舎の寺なんかに移り住みまして。我々、段原国民学校では5年と6年の残留組と近所の子どもが30名くらいしか登校しておりませんでした。そして、登校したって授業はないんです。校庭を耕しましてサツマイモを植えていました。それから豚を飼ったり、ひどいときになると本土決戦のために竹槍を作ったり。上陸してきたアメリカ兵をこれで突き刺すんだって。子どもながら、馬鹿なっと思っていました。こんなもので殺せるのかって。先生にも質問しましたが答えはありませんでした。

防火地帯をつくるくらいですから、いつかは空襲にやられると思っていました。隣にある海軍の呉軍港はしょっちゅう空襲されていたんですが、広島は落とし忘れた爆弾を2～3発落として帰るくらいで。ところが前の日に二度、空襲警報がありました。おかしいなと思っておりました。空襲警報が警戒警報に代わって、警戒警報が解除されたのが朝の7時半でした。だから広島の市民は市の中心部への動き始めました。段原国民学校は私の家から歩いて15分くらいのところですから、私も学校に行きました。

学校に行ってもすることが何もないものですから。私は校舎2階、職員室の斜め上の教室の真ん中で本を読んでいました。すると友達が二人くらい「Bだ、Bだ」と言いながら走っていきました。BとはB29のことなんです。いつも1万mの上空を一機か二機、飛んでいましたから、「ああ、またか」と思っていますと、そのとたんにも物凄い閃光がしたんです。目の前が真っ白になったと思ったら、次に来たのが衝撃波です。校舎の倒れるバリバリッという轟音と共に一瞬の間に校舎が潰れてしまいました。気がついてみたら真っ暗なんです。光もない、音もない時間がしばらく続きました。私は死んだと思いましたね。死ぬということは簡単なもの

だな、と思っていましたら、しばらくして「助けてくれー」という声がかすかに聞こえだしまして、生きていることを知りました。私は落第していて同級生よりも歳が一年上なものですから、しっかりせい、しっかりせい、ということも思っていました。

しばらくすると一条の光がスーと入って来ましてので、どうやってよじ登ったのかわかりませんが、外に出てみたら潰れた校舎の屋根の上でした。真っ暗闇で視界が見えないのですが、西の空、頭上に原子雲がグイッ、グイッと上昇していくところでした。「あれはなんだ！」と言っても誰もわかりません。さらにしばらくすると月明かりくらいの明るさになりまして、校舎の峰に立ってみると、学校ばかりではなく周辺の家が全部潰れているんです。何が起こったのかさっぱりわかりませんが、とにかく校庭に降りました。シャツに小さな手の痕が少しついておりました。友達の話によると一生懸命引っ張り出してやったぞと、言うんですけれど。結局、8時15分から9時過ぎまでそこにいたのだと思います。ところが大人が誰もいない。学校の先生もいない。火がまわってきたので助けを呼ぶ友達を捨てて逃げました。

私が逃げた後で教頭先生が這い出してきた、広島駅から比治山下経由で宇品へ向かう宇品線に出て、まだ下敷きになっている子どもがいるのだということ呼びかけた。そうしたら当時18歳の、今の広島大学工学部だと思うんですが、学生10人が助けに来てくれた。だけど助けられたのは一人で、あとの二人は焼け死ぬのを見ているだけだった。私が去った後に起こった悲劇を広島テレビの『助けてあげられなくてごめんね』という放送ではじめて知ったんです。ですから原爆の被害は個人の体験からだけではわからない。同じ場所で起こった悲劇を私も初めて知りましてね、本になっておりますので持ってきましたので、あとで見て頂きたいと思います。

潰れた校舎から這い出してきた、比治山下経由の電車路に出ましたら、ここで地獄を見るわけです。広島駅へと負傷者が歩いて来るんですけれども、はじめはぼろ切れをきているんだなと思って近づいてみると皮膚なんですね。夏ですから、ピカッと光った時の物凄い熱線で焼かれて、直ぐに衝撃波が来ますから、皮膚がはがれて垂れまして。手の甲の部分は強いんですね。そこから皮膚をぶら下げた格好でゾロゾロ、ゾロゾロ。そしていったん倒れると起き上がらない。お母さんが逆さまに子どもを抱いて走っているのかと思ったら首のない赤ん坊を抱いて走っている。まさに地獄絵さながらのことを13歳で見ました。

何とかして家に帰ったのですが、比治山で爆風は遮られて、家はただ建っているだけ。屋根瓦は吹き飛んでいますし、天井はないし、床も吹き上げられて、壁もありませんでした。私には兄弟が5人おりました。昭和18年、あの悪名高い「ペンを捨てて銃を取れ」、学徒出陣です。二番目の兄貴は東京に写真の修行に行っていたのですが、写真も材料がないということで一番上の兄と同じ東京外語を受けたんですが滑っちゃって、上智大学に入っていたところを兵隊にとられるわけです。彼は、兄貴と一緒に海軍の下級将校になりましてね、1年間、どこかの学校で勉強すれば少尉になる。だから兄二人は兵隊にとられていまして、原爆を受けたのは父と私と弟と、姉と母だったんです。

家はそういう調子だったのですが父だけは帰ってきませんでした。父は今は三越百貨店にな

っておりますけれども中国新聞に勤めていました。約900mの距離だったんですね。帰ってきませんでした。探しに行ったんですけれど、とても中に入れないので、あきらめて10km離れた安芸中野という広島駅から二つ目の駅になるところへ逃げていきました。夕方ごろに着きましたけれども、そこに逃げていくときには火傷の人が油をぶっかけられてね。食用油ならばまだいいんですけれど機械油までぶっかけられて、ドロドロの姿で苦しんでいる人たちがたくさんいました。専念寺という寺に入ったんですが、30人くらいの火傷を負った人達が寝かされておまして、治療は焼けた皮を剥いでホウ酸を振り掛けるだけだ。明くる日にはもう死体になって、それを焼く方が先だということで。そんな地獄絵がずっと続きました。

翌日父は無傷で帰ってきました。父の「広島はもうのうなったぞ（全滅したぞ）」の言葉で全市の惨状を知りました。の父も3年後、昭和23年2月2日に白血病で亡くなりました。父がいちばん爆心地の近くにいたので病気になるのも早かったですけれども、歯茎から血が出たり高熱、それから下痢ね。赤痢だといわれていましたが粘膜から血が出るんですね、急性症状というのは。それから髪の毛がごっそり抜けると、そういう症状が父にも出ました。私も似たような症状はありましたけれども、秋ごろには小学校の授業に出ることができるようになりました。

私が住んでいた中島では、当時は第6次の建物疎開の作業が行われておまして、平和公園に行きますと碑がたくさんありますが、私と同年代の11校の生徒2,000人とそこに住んでいた住民が9,000人、それから一瞬にして未亡人村になったという川内村、義勇隊で主人を全部引っ張り出されたものですから村に100人近い未亡人が出来たという、そんな悲劇がありました。1万2千人中レストハウス（旧大正呉服店）にいた一人を除き全滅しました。

中島町はほとんどが一家全滅なんです。爆心地では、今はレストハウスになっている大正呉服店の地下にいた一人が助かって、その人が原爆直後の爆心地の状況を話してくれて、物凄い竜巻が元安川の水を吸い上げた、通常の間人では見ることがないような情景が繰り広げられたわけです。父が白血病で死んで、私も胃がんになって、弟も大腸がんになって。弟は亡くなったわけですが、ひとりやふたり殺されたって言えなかったですね。一家全滅がほとんどだから。

長崎の修学旅行生が証言する被爆者に「死にそびれ」と言ったといいますね。そうなんです。「死にそびれ」なんです。どうして自分が生き残ったのかわからないです。だから原爆に対して抵抗するという立場がなかなかとれずに逃げ回っていたわけです。亡くなった友達のお母さんに会うと、あの子が生きていたら片山さんみたいに立派になっただろうと。穴でも入りたような気持だったですね。あの状況では、誰も人間らしい行動がとれる状況ではないと振り返りつつも「友を殺しちゃった」との思いが消えませんでした。「漂流」していたと言えます。

逃げ回っておりましたけれども、僕の親友の片岡脩がお父さんとお兄さんを殺されて、破壊の広島から逃げたいということで東京芸術大学に受かって、商業美術デザイナーになった。それが被爆40周年の時に堰を切ったように、彼は証言ではなくポスターで、『ラブピース 片岡脩 ポスター展』というのを全世界的な規模で開き出しました。その第1回ポスター展を広

島でやるというので広島に行きました。級友に会いました。私が小学校に入っていたときの写真は1枚しかないんです。1年生で入学した時の写真です。

谷本公という喧嘩大将がいたんですね。広島二中の一年生で爆心地で殺されたわけですが、お兄さんに会ったら中島で被爆して、這って江波の自宅まで帰ってきた。昼過ぎだったということです。頭に穴があいていて、よくショック死しないで生きていたなあ。ほとんどが行方不明なんです。谷本君は家に帰って畳の上で、お父さん、お母さん、兄弟に看取られて亡くなるわけですが、そういう幸福な人間は少なかった。なぜかという識別できないんです。産んだ我が子がどういう特徴を持っているかということはお母さんがいちばんよく知っている。それでもわからない。なぜわかったのか言えば、答えてくれたからだ。名前を呼んでいたら、ここよと答えた。なんぼ見ても我が子とは思えない。

谷本君は「仇を討ってくれ」と言って死んだというんです。お兄さんと酒を飲みながらどういう意味かを話し合いました。谷本君はB29をやっつけてくれというぐらいの気持ちだったかもわからないけれど、死んだものに代わって我々が何を出来るかといったら核兵器をなくすことより他はないんです。そういう思いに至りまして、先輩の被爆者の後ろについて少しでもお役に立てばと。やっとな爆に対して「漂流」から「抵抗」への道を歩みはじめました。

片岡脩は100枚のポスターをつくろうとがんばっていたけれども、彼は90枚程度つくったところであの世へ行きました。でも、片岡はメッセージを残してくれましてね。「平和だからこそ世界のひとと仲よく生きられるんだ。いまこそ繰り返し繰り返し平和を訴えなければ」と。彼の遺言なんですね。彼のお蔭で私も引っ張り出されまして、拙い口で訴えております。

証言を聞いた学生諸君から「原爆で何を思い出しますか」と聞かれるんですが、ウジとハエ、そして匂いです。どうしてこんなに広島にハエが集まったのか。集まったのではないんです。生きた人間、あるいは死んだ人間から出てきたハエなんですね。それから原爆の1ヵ月後に、マンハッタン計画の副主任のファーレルというひとが、広島でウジ虫をわかせてのた打ち回っているのに「広島・長崎では、死ぬべき者は死んでしまい、9月上旬現在において、原爆放射能で苦しんでいる者は皆無だ」という声明を世界に向けてだしました。そしてやったことはプレスコードです。原爆について語っても、調べても、書いてもいけないという。平和公園に行かれますとジュノー博士の胸像がありますけれども、のた打ち回っている被爆者をみて、スイスからペニシリンを送ろうとしたらしいんですが、どこへ行ったかわからない。治療してはいけません。だから被爆者はモルモットだ。実験に使われたんだと。

それから終戦前ですが交番に『新型爆弾に対する心得』が張り出されましてね。コピーを持ってきましたが【資料④】、火傷をした時には海水をかぶればいい。私はその時に因幡の白ウサギを思い出しました。悪いことをして皮を剥がれたウサギが海水をかぶってのた打ち回ったという。日本の政府は今でもそうですが隠していたんです。「原子爆弾」という言葉は聞いたことがありませんでした。「新型爆弾」「特殊爆弾」。私は今でも覚えているんですが広島に原爆が落とされたときの報道は「広島へ敵新型爆弾 B29少数機で来襲攻撃 相当の被害、詳細は目下調査中」。長崎の時はどういったか。「長崎市に新型爆弾 大型二機侵入・被害僅少」。まだ戦争を続けようとしたんですよ、日本は。原爆で戦争が終わ

ったのではない。

どういったらいいんでしょう。69年前の話を皆さんの想像力で補ってもらわないと。とてもじゃないが私の証言だけでは再現できない。新藤兼人監督がシナリオだけ書いて、ようつくらなかったんですが、もし原爆の本当の映画をつくろうと思ったら広島市民100万を使わないとできないって。お金がなかったから乙羽信子を使ってささやかな原爆の映画をつくりましたけれど。それだけ核兵器の被害は大きかったということです。

原爆は地域社会までひっくり返す。阪神淡路大震災の時も昔を思い出すなんて言う被爆者がいたから、バカタレと言ったんです。広島の際は県知事も死んでいる、市長も死んでいる。市役所で配給課長だった浜井さんというひと、あとで市長になりましたけれど、彼だけなんです、動けるのが。警察も消防も病院も全部やられていますから阪神淡路大震災どころの騒ぎではない。天災は人間を殺そうと思って起こるわけではない。ところが原爆、核兵器というのは人間を殺すことだけを目的とした兵器ですから。

広島に落とされたときに、仁科さんですか、原爆をつくろうとした学者がいるんですけど、日本政府は広島に落とされたのが原爆か信じられないというんです。本当に原爆かどうかを調べてこいということで、仁科博士が調べてまちがいなく原爆だと。その一か月後に京大の理学部と医学部が広島に入ってきて、やっと調査を始めたんですが、一か月後には枕崎台風が来た。全国で4,000人くらいの死者が出たらしいですが、広島ではそのうちの2,000人くらいが殺されました。この台風が広島の瓦礫も死体も放射能も全部、広島湾に流してくれました。あとから研究しようと思ったけれどダメになってしまった。そのときに調査に入った京大の先生方も20人くらいが宮島対岸の山津波で全員死んでしまった。そんな悲劇もありました。語り尽せないですけど。

30年前の被爆者の置かれていた位置は今のようには立派ではなくて、アメリカで核兵器廃絶を訴えたらリメンバー・パールハーバー、返ってくるのはその言葉だけでした。確かに歴史を記憶しろというのは正しいのですが、その使われ方をみると「覚えていやがれ！今に見ている！」という感じの使われ方だから、リメンバーというのは報復を肯定するような意味で使われているのではないかと非常に気になっていました。被爆者の場合は世界のどこにも私たちのような被爆者をつくってはいけません。報復を求めない。否定するものです。アメリカが憎いとか、そういうことはない。全てノーモア、そういう世の中が来てくれたらね。ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・フクシマ、ノーモア・ウォーです。この思想こそ戦争を根絶することができるという思いにかわりました。

今から30年前、日本政府は「およそ戦争という国の存亡をかけての非常事態のもとにおいては、国民がその生命・身体・財産等について、その戦争によって何らかの犠牲を余儀なくされたとしても、それは、国をあげての戦争による『一般の犠牲』として、すべての国民がひとしく受忍しなければならない」といいました。この考え方は今も微動だにしていません。

被爆者はまず国に謝れと言っている。殺された人に謝れ。まだ国は謝っていないません。謝

らせるまでやりたい。中には賠償金なんか払ったら日本が潰れるぞという人もいるけれど、金は一銭でもいいんですよ。謝れということですよ。謝ったらもう戦争はできませんよ。もう戦争はしませんからこらえてください、ということをお求めているんです。被爆者も平均年齢が80歳になったから、命のバトンタッチを皆さんにしたいと思うんです。広島での平和記念式で嬉しかったのは段原国民学校の後輩が平和の誓いを読んでくれているんですね。

あの廃墟の中から立ち上がり、広島での街の命を消すことなく、灯し続けてくれたおじいさん、おばあさん。今度は私たちが平和のリレーランナーとして、受け取った命のバトンをしっかり握りしめ、戦争や原爆の恐ろしさと平和の尊さを語り継いでいきます。そして一人一人が平和を創り上げる主人公となり、身近にできる小さな平和の輪をたくさん創り、その輪を世界中に、そして、次の世代へとつないでいき、世界平和という大きな輪を創り上げていくことを誓います。

(2002年 平和への誓い)

嬉しかったですね。段原小学校の校庭には隅っこの方に30cmくらいの小さな地蔵さんがたっているだけですけれどね。みなさんに訴えて、命のバトンをみなさんに渡してあの世に行きたいと思います。

※被爆の実相を伝え残すため、あらためて詳しくお話をうかがうことはできますか？

1. 可    2. 不可



**【聞き取りをおこなった方の記入欄】**

聞き取り日時	2014年8月24日(日)13:30~16:00	場所	主婦会館プラザエフ
聞き取りをされたのは	グループ[名称:ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク 「被爆の証言を聞くつどい」]		
聞き取り票記入者	島村雅人	TEL/メール	03-5216-7757
連絡先	〒102-00850 東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F		
住所等	TEL/FAX 03-5216-7757		

4. 聞き取りの感想、受け継ぎ手として世界と次世代の人々に伝えたいことをお書きください。

**【ディスカッションの概要】**

司会：このあと一つだけ質問させていただいて、そのあと休憩に入りたいと思います。休憩の間にお話を聞いてどんなことを感じたか、お話の中に「命のバトンタッチを皆さんにしたいと思う」というお話がありましたが、お話をどう受け止めたか、今日のお話を聞いて考えたことなんかを交流していきたいと思います。質問ですが、お兄さんがBC級戦犯として処刑されていらっしゃるんですよね。そのお兄さんに関して思いでとか、感じることを、考えていることなどありましたら。

片山：私の家には御真影が無かったですね。だいたいの家庭には天皇皇后両陛下の写真が飾られていたはずなんですけど、家には無かったですね。では、しっかりした家庭かというところでもないです。兄は東京外語を昭和16年に卒業なんです。それまでは大学専門学校に行ったものは兵役が延期になっていた。ところが太平洋戦争がはじまって文科系は延期がダメになった。文科系は戦争に行けということです。特に東京外語の英文だったですから、英語は敵性語だから直ぐに広島連隊へ引っ張りこまれて、赤地に星が一つの二等兵で。やっぱりいじめられたらしいですね、ぶん殴られたり。その時に国も良く考えたものですね。海軍兵学校に行けばエリートなんです。それに次ぐ学生上りのインスタント将校をつくらうとしたわけです。1年間指定する学校に行ったら下級士官、少尉になる。兄の場合は海軍経理学校に行って1年で少尉になって、英語ができますから情報士官としてインドネシア、アンボンという香料の基地だったところを海軍の基地にして、そこへ配属されたんですね。

1年間くらいしかなくて、鉄砲を撃つようなことはしなくて暗号解読をしていたらしいです。オーストラリア空軍が攻めてきたときに隊長機を落としました。スコット少佐以下3名を捕虜にした。それが司令部にとどめ置かれて、一か月くらい後に兄の部隊に死刑の執行命令

が下りた。そのころは日本人の下で働いている台湾の高砂族、軍属ということでこっぴどく使われた人たちがいたんです。勇猛果敢な人たちがいたんです。兄に処刑の執行命令が下って、「処置しろ」と軍属に言えば終りだったそうです。「おまえらが殺せ」と。

ところが少佐ですから失礼なことではできんということで、兄と森岡高等農林を出た学生上がりの将校3人ぐらいが立ち会ったらしいです。兄はそのあと海軍軍令部に栄転になって、東京に戻って結婚しました。終戦後は厚生労働省の仕事で呉で終戦処理をして、東京へ帰って。昭和21年ですか、就職したら新聞にBC級戦犯として名前が載ったわけです。叔母にパルおばさんという英国婦人がいました。そこへ相談に行ったら、オーストラリアは英国と兄弟の国だから申し開きをしてこいということで巣鴨に出頭しました。そうしたら直ぐに立川から鹿屋、沖縄、フィリピンと経てモロタイ島で裁判を受けるわけですが、3日間で予審もなく死刑の判決が下りました。

兄が立派だと思うのは、英語ができますから彼なりのたたかいははじめまして、高砂族の戦犯容疑者を救ったらしいんです。兄の遺書は高砂族の助けられた人間が水筒やら靴の裏に隠して持って帰ってくれました。三枝という作曲家がいて『ラストメッセージ』という第2次世界大戦で殺された人の遺書を曲にして合唱曲をつくってくれたんですけれど、その最後に兄貴の遺言が載ってましてね。自分が死ぬのは太平洋戦争で日本が為したことの責任を取って死ぬんだということまで考えを煮詰めてくれたましたから、大したものだと思うんです。それを自民党の先生方に話したら、「オーストラリアだけじゃない」と、こうなるんです。おまえの兄貴は絶対に悪くないといってもさ、戦争というのはそういうものです。国際法を勉強したわけではないし、全然通用しないんです。上官の命令は天皇陛下の命令だ。だからやったんだといってもそんなことは海外では通用しない。でも、軍隊組織というのはそういうものです。だから兄貴は立派に死んでくれたと思います。

血筋からいうと兄貴はつながっていないんです。

司会：養子だったということですか。

片山：結婚して2年しても子どもができないからということで。それは写真を見たらわかるんです。他の兄妹とは似ていない。だから兄貴は自由にさせてもらっていましたね。写真屋の息子といいながら、英語が好きだから外大へ行きたいといえば行かせて。でも、いちばんかわいがってくれましたね。優しい男だった。

司会：クリスチャンだったんですか。

片山：教会にアメリカなど外国の牧師さんが多い時代だったですから、そういうところへ出入りをしたかったんでしょうね。まあまあ、普通の学生だったんじゃないんですか。柔道が強かったといっても、外大の主将格だったといいますけれど、お袋に言わせると弱い黒帯で鼻っぱしをおられて帰ってきたということを知ったことでもありますから。優しくかったですね。

(休憩)

司会：今までの話を聞いて、自分がどんなことを感じたかということなど、感想を述べて頂ければと思います。

□：私自身、初めて被爆した方のお話を直接聞いたので、ほんとうにありがとうございました。質問はいくつかあるのですが、まずひとつだけ。この前の平和式典で安倍首相がスピーチをしましたが、毎年同じことを言っているとか、そういうことが話題に上がったり、平和主義と言いながら集団的自衛権のこととか、原発のこととか、矛盾していると感じています。片山さんはそのことをどう思っているのかということと、片山さんは日本が平和な国になるためにどういうことをしていったらいいと考えているのかということをお聞きしたい。

片山：言葉のことは大江健三郎さんに任せた方がいいかもわからんね。文学者としてどういう言葉がいいか。峠三吉の『人間をかえせ』、「父をかえさ」からはじまる、その言い方がいちばんポピュラーだと思っている方が多いと思いますが、そうでない方もいる。大江さんは原民喜の言葉をアメリカの学生に送っています。文学者ですから僕が読んでみてもわからないこともあるんです。竹西寛子さんの『五十鈴川の鴨』には、被爆した男が結婚もせずに仕事を全うしてリタイアして五十鈴川に行ったら親子連れが泳いできた。それを見て「ああ、いいですね」と言ったという、僕にはそのどこがどうなのかわからない。

やっぱり行動しないと本質はわかってこないと思うんです。何かできることがある。6年から原爆症の認定を求める集団訴訟というのをはじめまして、3年間、雨の日も風の日も厚生省の前に座り込みました。あそこに座っていると日本の動きがわかるんです。私は認定されていたから、認定訴訟を起こした被爆者が言うんです。片山さんは原告でもないのになんで座り込んでいるのかって。

昔は自分には知恵もない、お金もない、力もない。そういうおじいさんやおばあさんが座り込んだんです。その力です。通る人がなんで座り込んでいるのかと聞きますから、それで話ができる。だんだん広がって署名を集めてきたぞと持って来てくれるひとがいる。

片岡脩は love Peace で、

Let us live forever in Peace. (平和のうちにいつまでも生きていけるように)

Over and over, I pray for Peace. (繰り返し、繰り返し、平和を訴え続けなければ)

Various people can live at Peace. (平和だからこそ、さまざまな人たちと生きられる)

Each of us can do something for Peace. (ひとりひとりに何かできることがある)

と訴えた。私はこれだと思っています。これしかないですよ。うまい手はないですよ。出来ることをやる。寝たきりになっても安倍総理にハガキを書くことは出来るんです。それがどれ

くらいの力になるかはわかりませんが、そういうことをやっていかないと。

同じことに聞こえるかもわからんし、素晴らしいことを言うと感心する人もいますし、あれは公務員が言葉を選んでつくるんだから妥協の産物かもわかりません。

広島に行くと、よその人が入ってきやがって、騒いでばかりいやがってって。そんな根性の被爆者もいますから。

集団訴訟の座り込みの時にも話したんだけど、片山さんはワーワー騒いでいるらしいが認定問題よりもうちの親父が殺されたことはどうなるのかというから、我々が言いたいのはそこなんだと。受忍論に少しでも穴をあけないといつでも戦争ができる。政府は戦争の被害は受忍すべきだと言っている。戦争が起こって親や子どもが殺されたって、財産を失ったって、すべからく受忍すべきだ。今の被爆者援護法は受忍論で原爆被害への補償じゃないんです。被爆者もわかっていない人がいる。だから署名用紙を送ってやったんです。この署名が受け入れられるなら私は死んでもいいと言ってやった。原爆死没者に弔意を示す。なにがしかの金銭補償をする。お金は一銭でもいいんだ。お金じゃないんだということなんだ。こらえてつかあさい、もう戦争はしませんからと。誰一人としてそれを言わない。言ったら戦争できませんから。

□：遠い親戚が被爆していてケロイドの痕とか子どものころに見たこともあるんですが、でもちゃんとこうしてお話を聞くのは今日が初めてで、考えることも多かったんですが、いちばん印象に残ったことが「死にそびれ」という言葉で。実際にそういうふうに言われると、どう思うのかって。

片山：マスコミが伝えなかった話があるはずなんです。騒いだ子どもにやかましいから出て行けと言ったのが長崎の被爆者で、売り言葉に買い言葉で出たのが「死にぞこない」って言葉で。どっちもどっちだと僕は思います。むしろ子どもが聞きたくないのはわかっているんです、証言しに行っても。それは聞きたくないですよ。もっといい話があるはずなんです。でも、その子どもたち、若い人たちも今の情勢からいけば避けて通れない問題でしょう。核兵器もそうだし原発もそうだし。だから「死にそびれ」の話を聞いてくださいと、僕はいつも心の中で思っています。僕が証言に行ってたときも、聞きたいという人は真ん中に来るんです。聞きたくないというのは外れの方にいまして、高等学校なんかに行くと後ろで10人くらいが腕でバツ印をつくっているんです。聞きたくないって。それが本当なんです。でも、聞いてもらいたい、わかってももらいたい。それは面白くないですよ。面白くないです。いい話でないもん。でも、事前授業で『はだしのゲン』を読んでいて、あの話は本当だったんだとびっくりしている子どももいたり。あれは架空の話だと思っていたら、本当の物語だったって。

当たり前でしょうね、「死にそびれ」というのは。助けてくれという人間を救えなかった。被爆者の先頭に立って運動している岩佐さんはお母さんを助けられなかった。お母さんに逃げなさいと言われて逃げた。沢田昭二さん、名古屋大学の先生ですが、このひともお母さんを救い出せずに逃げた。沢田さんはお母さんを殺した物理学を学んで、沢田さんの後輩から二人ノベル賞をもらったひとがでたけれど、それをサポートした。岩佐さんは憲法を学んで金沢大

学で憲法を教えた。ともに被爆者運動の先頭に立っている。僕だったらダメだ。僕は母が殺される、そういう極限の経験はしていない。そこまで行っていたら気が狂うような調子じゃないですかね。やっぱり「死にそびれ」というより「見捨て」でしょうね。見捨てて逃げた。

伊藤壮という僕の先輩も、東友会の会長で最後は山梨大学の学長で終わってんですけど、やっぱりすばらしい考え方を持っていましたよね。高等学校で英語の先生をやりながら一橋大学院に通っているときに、教育委員会から呼ばれて、被爆者運動をやめられませんか。その時に彼が言った言葉がすごいですね。「私が被爆者をやめられるなら。私は死ぬまで被爆者だ。」人生曲げられないことがあるんだって。そういうすばらしい先輩がいたからついてこれたんだと思うんですね。

「死にそびれ」と「見捨て」。今は「心の傷」、PTSDという言葉があるけれど、僕はそんな感じになったことはないけれども、ただやっぱり申し訳ないという気持ちはありましたね、生きていることを。じゃあ、何をしたらいいかということ、片岡の言葉ですが「何かできることがある」。証言もその一つだろうし、署名も一つだろうし。やっぱり市民に訴えていかないとわかってもらえない。今、被爆者は何をしているのか。やはり打って出ないと。原爆症認定の裁判で勝ってよかったね、で終わりじゃないんです。裁判は一つの手段で、裁判を通じて国がいかに被爆者を苛め抜いてるかということをはっきりさせることなんだ。でも、下手をすると金の問題にされてしまう。認定されると月に13万なにかの金がおります。そちらの方に 관심이いってしまう被爆者もいるんです。被爆者の全部が岩佐さんや沢田さんのようだったら日本は変わりますよ。

被爆者は運の悪い人の集まりでしょう。たまたま広島、長崎にいただけの話で。今、言っているのは核兵器は人間と共存できない。それと国家補償にもとづく被爆者援護法をつくれという二つなんです。叩き落されたときのバイブルにして、そこから這い上がった来たんだと、そういうことでしょうね。

片岡脩が打って出た。彼の場合は800mでしたからね。中島小学校へ8人入ったんですけど2人助かった。でも片岡も80歳まではよう生きませんでしたね。最後は全身ガンで。

□：いちばん最初におっしゃっていた「昔話ではなく現在につながる話として」というところからお話されていたのが印象に残っています。私は5月に教育実習で中学校に行き、私自身は英語の教育実習だったんですが、一緒に教育実習をしていた子が社会の担当で、中学3年生は広島に修学旅行に行っていた直後だったので、その授業でその題材を取り上げて、アメリカの原爆は戦争を終わらせる手段だったという言葉を用いて、クラスの子たちにどう考えるかということをやらせたら半々だったと。先生としては広島に行った直後で記念館も見ているからみんながその意見に反対するだろうと思っていた。それが半々だったということに衝撃を受けていました。私も実際に経験された方のお話をきちんと聞きたら、絶対に戦争を終わらせる手段だったという方は選ばないとおもうんですが、映像や展示だと昔話として遠い話になってしまうと思いました。だから実際に経験した人のお話を聞くことの重要性をあらためて認識できたので、とても貴重な機会だったなと思いました。

そういう子どもたちもたくさんいる中で、そういう子どもたちにいちばん伝えたいことはどうということなのかお伺いしたいと思いました。

片山：そうですね、平和ですよ。今の情勢の中で危機感を持っているわけですよ。ならず者国家がいて攻めてくるとどうのこうのと。それはそれとして、人間は口があるんだから、やっぱり時間はかかるだろうけど話しあわにゃダメですよ。その危機感は非常にあるんですよ。

だいたいわかっていたんですよ、原爆を落とされる前から。広島にいて戦争に勝てると思ったことは一度もないですよ。だって戦車もなければ飛行機もない、大砲もない。武器がないんですよ。広島は兵隊を集めて宇品から大陸に送り出すだけの街だったんです。それが軍都と言われますから。証言中にアメリカ兵が日本の奥さんを連れて入ってきて、広島はどんな要塞があったんだって。冗談じゃありませんよ。飛行機を見たことがない。戦車を街で走らせたなら直ぐにアスファルトが捲れてだめになっちゃう。それが軍都だ。

死刑になった兄貴も、もう一人の兄貴も、戦争に行く時は日本は負ける言っ出ていきました。ただ二面性をもっていますからね、日本人は。建前と本音をうまく使い分けますから。外では勇ましいことを言っているわけですよ、兄貴も。で、家に帰ると日本は負けるぞって。私は兄貴に非国民だと言ったこともある。おまえははまだチビだからわからんなあ言っ。そういう人間が殺人なんかしないですよ。負けるとわかっていて。本当の情報をつかまえる力を子どもさんの中につくってほしいよね。僕らはそれがなかったから。

□：ちょこちょここちらの会のお手伝いをさせて頂いて、何人かの被爆者さんの体験を聞いたり文字起こしをしたりしたんですけれど、ひとりひとりが別の悲劇を持っているというか、体験したことが違うわけで、私が一番印象深かったのは、頭に穴があいて家に這って戻った男の子が幸せだった、家で死ねて幸せだったというのを聞いて、涙が出そうになって。遺体が見つかっていないひとたくさんいて、この世の地獄を体験したということは、今の私達には想像もつかない。話を聞いたとしても、想像してもわからないことはたくさんあって。

13歳で地獄のような光景を見て、大人になって思い返されたりとかしましたか？今の子どもたちが同じ光景を見たらどうなると思いますか。

片山：中島には寺が11もあって、お寺さんに飾ってある地獄絵図。それとそっくりな情景が広島で起こったわけです。風は吹きすさぶ、火は燃えあがる、その中で助ける人はひとりもいない。地獄だろうと思います。1000年以上前のお坊さんが考え出した架空の世界なんです、まさにそれが目の前で起こっちゃった。

認定裁判の時に国は、こういう道路があるのに、なぜこの道路を通らずにこっちを通ったのかって。それは地図の上の道なんだ。実際は通れないんだって。家に帰るときだって屋根の上を通るような感じで帰って来た。その屋根の下に埋まっているわけですよ。それにかまっておれんもんですから、子どもだし逃げるような格好で家に帰っちゃった。助ける余力もない。自

分のことだけで、逃げちゃう。そんな世界というのはいやですね。人間だからしょうがない。いつでもそういうことは起こりうると思うんです。

広島では放射能のことは封印されていましたからね。だから被爆者のおじいさん、おばあさんがなに言いよるかといいますと「悪いガスを吸いましてのう」。放射線は目に見えませんが毒ガスだと思ったんです。放射能、原発事故で入っちゃいかん所でマスクをつけてください。バスから勝手に下りないようにしてくださいとテレビでやっていますよね。広島もそういう状況だったと思うんですが、隠しましたからね。だからひどいですよ、爆心地にバラックが一週間したら立ち始めました。ひどいになるとね、広島城が北の堀に倒れちゃった。広島城の廃材でバラックをつくったと威張ってるやつがいた。魚も原爆症になるんですよ。ぼっかぼっか浮いて。それを七輪で焼いて食った。それを教えなかったからね、いい加減なものですよ。いまだに隠しているから。どこを隠しているかもわからない。本当のことを言わない。

□：私もこのように直接お話を伺うのは初めてのことだったので、すごく貴重な体験になりました。ありがとうございます。当時の状況は想像しても想像しても、その悲惨さをさらに超えるものなんだと思いました。去年私はイギリスに留学していました。そこで話す中でヒロシマ・ナガサキの話はやはり出て来るんです。そのことについて話すと、原爆は戦争を終わらせるために絶対に必要だったという方がけっこういらっちゃって。片山さんには外国の方にこういうお話をしたいという気持ちというのはおありでしょうか？それとも日本の方を中心にとのお考えですか？

片山：少し英語を勉強しておけばよかったと思う。通訳を介してやるというのは真意が伝わらないですね。私の従姉妹がアメリカのニューヨークに住んでいまして、彼女も被爆者ですから、この間、電話がありまして、これから証言をするんだって。でも、やっぱりアメリカの方が厳しいようですね。スミソニアンの問題があったように。ヒロシマ・ナガサキの原爆でアメリカ兵の命も本土決戦になったときの日本人の命も救われたと。

私の友人にも東大出のエリートがいてね、核の傘の中に入っているからというのがいるんです。ところが共通しているのは原爆を正当化しているのは許せない。とんでもない話ですよ。

当時の新聞をみたらいいと思うんです。広島原爆については「被害甚大、目下調査中」となっています。長崎の時は「損害軽微なり」。わかるでしょう、まだやろうとしたんです。原爆で戦争が終わったわけじゃない。頼りにしていたソ連が不可侵条約を破って攻めてきて、それで降伏した。それを言うのが大変なようです、アメリカでは。ヒロシマ・ナガサキで戦争が終わったということが定着しているようです。それをぶち破ろうというのは大変だよ。

□：ポールティベッツは自分が英雄だと信じて死んでいったわけですけど、それについてのどのようにどう思われますか？

片山：やっぱりアメリカではそれが標準的な考え方になっているんじゃないですか。僕は戦

後に三省堂に入りまして、営業だったから本をつくったことはないですけど、びっくりしたのはね、インドネシアかシンガポールかな。教科書ですよ。原子雲をバックに万歳しているんですよ。原爆によって日本から解放されたって。だからどこの大学の先生だったかな、世界には二つのノーモアがある。僕らというノーモアは被害者のノーモアだ。加害者のノーモアはアジアの人。それを一緒にしてこそ本当のノーモアだ。だから難しいですよ。向こうの教科書の表紙がそうなんです。びっくりしました。そういう見方もあるもんですから、特にアジアなんかは注意しないとね。被害者として日本はワーワー言っている、向こうの人にしてみればカチンと来る点もあるでしょうね。そういう気配りもあるんじゃないですかね。慰安婦問題とかもあるじゃないですか。いちばんいいのは共通の歴史の本をつくることだと思うけれど、なかなか出来んようですね。南京大虐殺はなかったとか。やはり検証しないとダメなんじゃないですかね。

□：みなさんのお話を聞きながら思い出していたのが亡くなられた方の人数の話なんです。中国だと南京大虐殺で30万人でしたか、亡くなったという話をされていて、広島と長崎は14万人と7万人で20万人ぐらい。数字でこちらの方が多くなくなったみたいな話で争っているということをメディアで聞いたことがあったりして。国と国、もしくは数字になってしまうと一人ひとりの命、生活があったものが見えなくなってしまうということを思い出していました。今日、片山さんのお話を聞いていて首のない赤ちゃんを抱いて逃げるお母さんの話ですとか、同級生の谷本さんのお話とか、おひとりおひとりがそこで懸命に生きていた中で起きた悲劇だということを忘れてはいけないなと思いました。先ほど修学旅行生の話がありましたけれど、どうしても昔の話と感じちゃうところがあるとは思いますが、できるかぎり多くの体験された方の話を聞いて、出来ることをしていきたいと思いました。

□：片山さんが最初におっしゃった被爆者の方のお話は全員一人ひとり違うということは僕もずっと思っていることで、今日の片山さんのお話も片山さんにしかできないお話なので貴重な場に来させてもらったなと思っています。いろいろ印象に残っていることはあるんですけど、片山さんが原爆から逃げ回っていた。けど今は違うと。その変わったきっかけというのはいつ、どのようなきっかけで変わられたのかなって。

片山：やっぱり片岡脩が打って出たということでしょうね。彼もずっと黙して語らずでした。彼は美術家として『Love and Peace』ポスター展を日本から始めてワルシャワ、ニューヨークでもやりましたし。彼のポスターというのは非常に大人しいんですよ。シャレコウベも飛行機も戦車も出てこないんですよ。やっぱり遺書と同じように優しいですよ。原爆で死んだ、という言い方がよくされるんですけど、私は殺されたと言っています。証言でも原子爆弾が落ちてきたという人もいますが、落ちてきたんじゃない。落とされたんだよね。自然現象じゃないんですよ。死んだ人間に対して申し訳ないという気持ちをどう解釈して、自分が原爆に抵抗する姿勢をとれるかということだと思うんです。やっぱりリーダーの先輩がいて、漂流から



抵抗へと学問的にサポートしてくれたのが一橋大学の先生方なんです。被爆者の生活調査を分析する中で、被爆者が追い込まれ、逃げ回っているのは当たり前である。ただし被爆者がこれから真の被爆者として生きていくためには抵抗より他にない。だから伊藤壮さんが言ったように被爆者は死ぬまで被爆者だ。死んだ人間に対して何ができるのかというのは微々たるものですけれどね。証言したり署名をしたり集めたり、座り込んだり。それをずっと続けていくしか私の場合はないですよ。もう、座り込む力も被爆者はなくなってきたようですからどうしたらいいか。もう一回やりたいと思うんですけどね、国会を取り巻くような。脊椎管狭窄症で歩くのもやっとなんですけれども気持ちだけは持っています。

先輩たちはいいことを言ってくれましたよね。よく言われました、広島で何万、長崎で何万人が死んだって。一人ひとり違った人間が殺されたんだよ。可能性が違ったね。だから簡単に数で言うなって。それが中国新聞に知れてキャンペーンをはってくれてね。一面二面三面、写真だけです、死んだ人間の。そういう記録が出ていた時期があるんですよ。だから数を集めてみよう。13万人死んだというのだから13万の石を集めてみろって。そういうことから実感させたということもやりました。

5, 6年前ですか、集団訴訟の行動で厚生労働省前に立っていたときに、隣に若い女性がいまして、帰りに名刺を頂けますかと言われて渡したら手紙が来ましてね。遠い遠い佐賀の片隅よりって。彼女は佐賀大の教育学部の学生だったんでしょね。被爆者の言うノーモアという言葉の温かさとか優しさとか、そういうものに興味を惹かれて行動に参加したんだ。被爆者という題で卒論を制作中ですよ。あとで佐賀の被爆者の方に聞いてみたら、彼女は教員に就職したよって。よかったですね。立派な先生になったでしょうって。そういう出会いもありますしね。やっぱり嬉しいですよ、若い方に話を聞いていただくのは。3年前に一橋大学の「学生9条の会」の100人くらいの人前で話しました。嬉しかったのは今日の聞き手は明日の語り手だと。だから私たちに任せてくださいって。「学生9条の会」100人くらいの組織ではなく全学生に打って出ますというから嬉しくなってしまうってね。被爆関係の本を全部一橋大学の図書館に送ったのよ。そういう嬉しさがあるんですね。みなさんにバトンタッチできたという。これでしょうね、あと出来ることは。私の孫は5人いまして、長女の孫は中学と小学校の男の子なんです、去年広島に連れて行きました。今、皆さんに話したようなことを話したら、興味はそこじゃなくて広島弁ですよ。もう広島弁ばかり興味を持って困ったことがありました。なかなかまだ時間がかかりますな。でも親父の方はダメなんです。お父さんに言ったら、誰が日本を守るんですかというから。それじゃあお前は、これから子どもを大学に行かせて、そのうち銃を持たせて国に命を差し出しますかって。いや、お父さんそれとこれとは別だって。何を言うかって。別だっていうのはとんでもない話だぞ。だったら親としてちゃんとした考え方を持てって。あのときお父さんはどうして反対してくれなかったのと言われないうちにね、やらないかんですよ。後じゃ遅いですよ。

司会：時間を超過してしまっているの、そろそろ終わりにしたいと思います。初めて聞くにしては聞く方も語る方も大変だったと思います。いっぱい宿題を持って帰るつもりで、これ

からそれぞれの学校でこういう機会を持つとか、それぞれの場で出来ることを考えて頂ければと思います。

ほんとうにひとりひとり被爆の証言は違いますから、いろいろな人の証言を聞いたり、あるいは読んだりということも必要かもしれません。高齢化が進んで、戦争のことを語れる被爆者は片山さんなんかの世代が最後だと思うんです。先ほど加害と被害の話が出ましたけれど、私が30年前に話を聞いたお婆さんは旦那さんが兵隊で中国に行っていたんですね。武漢三鎮の攻略作戦に参加して帰ってきて。中国の人から見たらお婆さんのご主人は侵略者ですよ。その旦那さんは二回目の召集で南の島に送られるんです。米軍は上陸しなかったんですが6000人いた半分以上帰ってこない。みんな飢え死にです。戦死は200人いない。中国から見たら侵略者でも、南の島で奥さんを残して飢え死にして、その奥さんは広島で原爆にあう。ひとりひとりの人生をみると被害者になったり加害者になったり、それを強いた上の者は責任を取っていない。片山さんのお兄さんもそういう中で亡くなっていったんだと思うんです。そういう証言はなかなか聞けなくなっています。私もそういうお話を聞いていなかったら被害と加害を別々のものと考えて、被害のことばかりじゃなく加害のことも語らなくては、勉強しなくてはと二択で考えていたのかも知れない。

いろいろな被爆者の証言を聞いたり読んだりして、自分で考えていくのが大事だと思いますので、それぞれの場でそういう機会を作っていただければと思います。

(服部さんのグループのお話が終っていなかったので続き)

片山：『助けられなくてごめんね』は色々なところでお話をされているので、それをコピーして持って来たんですが。この前NHKスペシャルでもやっていました。

□：私見ました。

片山：見ましたか。あのあと直ぐに電話がありましたよ。片山さんの話と違うじゃないかと。愕然としました。時間差ですよ。

□：片山さんが逃げられてから。

片山：逃げた後の話で。結局18名、先生が4名、22名がここで死んだということですよ。

□：広島だと若い人の語り部、伝承者ということをやっていますよね。あれについて片山さんはどう思われますか。

片山：いいんじゃないですかね。

司会：ご自身はどう思われます。

□：私はいと思います。

片山：ものとのとらえ方はいろいろあるようですから、どういうふうに入るのがいいか。難しいですね。私が証言を始めたころはドキッとする証言が多かったですよ。私は鬼でございましたって。

我が子を助けるために助けてくれという人に見向きもせず逃げました。逃げていく中で、目の見えない小学生が先生に連れられてきて、皆、目が見えないけど元気に自分の名を呼ぼうよって。先生も親を探しているから。そういう子どもたちにも水をやらなかったって。そういういちばん自分の言いにくいことをぶつけてましたね。そういう証言は少なくなりましたね。同じ被爆者として私はドキッとしましたね。その人は交通事故で死ぬんですけど葬式も何もしなかったですね。あの世に行くときには地獄に落ちればいいんだ。あの子たちに何も出来なかったって。あと原爆病がうつるというのもありましたね。レンコンを送ってきたので近所におすそ分けしたら、そのレンコンが捨ててあった。子どもが出てきてこれを食べたら原爆病になると言われてショックを受けたって。孫が異常があって生れて、あの時私は死ぬべきだったと証言する人もいて。そんな話は聞きたくない。嫌なんだね、こっちも。ドキッドキッドとして。

私もなぜ逃げられたのかと思うことがあるんですね。転校してまだ4か月くらいしか経っていなかった。だからあまり気にならなかったんだろうと思うけれど、中島で6年一緒にいた連中がそこにいたら、これは大変だったなと思ったり。難しいですね、人間。

司会：最後に一言ずつ。今日こういう機会をもって、これからどうしようと思うか。こういう集まりではどう感じたかという話をすることはあっても、どうするという話をすることはあまりないですね。ぜひ、命のバトンを渡されて、これからどうしようと思うか一言ずつお願いします。

□：私の場合は来年からメディア関係の仕事に行くので、いろいろあると思うんですが、証言だったりお話を伝えていく力があると信じているので、就職するまでにもたくさんお話を聞いて伝えていけるように勉強したいということと、証言される方がいなくなった時に自分たちがどういう発信の仕方をすれば子どもたちにもよりリアルに感じてもらえるかということも宿題として考えていきたいと思っています。

□：僕は普段沖縄戦のことをやっけていて、沖縄の戦争体験を聞くことが多いのですが、たぶん僕たちは戦争体験者の話を聞ける最後の世代だと思うので、聞くこと、考えることしかできないかもしれないですけど、いろいろな話を聞いたり、実際にその場所に行ったりとか、そういうことを続けていきたいと思っています。

□：今日、お話を聞いて、自分が何も知らなかったということにとっても恥ずかしさを覚えたので、これから日本人として、将来自分に子どもができれば母親として、きちんとした情報を伝えられるように勉強したいと思います。

□：色々な話をたくさん聞きたいと思いましたし、留学されていた方の海外の人の話し合ったという体験を聞いて、私も海外の人の考えたに興味があって欧米文化学科に入ったので。海外の方の原子爆弾への考え方や認識がまったく違う。ハリウッド映画で原子爆弾が爆発するときに鉛の冷蔵庫の中に入って助かるというシーンがあるんですが、そういう根本的な認識の差とそれを生み出した政府の教え方とかを学んで、そういう認識の差を埋められたらということを考えました。

□：私は依然インパール作戦に参加された方の証言もお聞きしていて、出来る限り直接お話をお伺いして、お聞きした上で自分の考えを発信していくということをやっていきたいと思っています。

□：命のバトンを渡されてということで、原爆というものに対して日本人の目とアジアの人たちの目とアメリカ人の目と、それぞれ異なるということに気づくことが出来ました。今までは日本人の立場で考えていたのですが、別の視点からも考えていかなくてはいけないということに今日初めて気がつくことが出来ました。

□：私も今は会社員ですが大学の時にアメリカに留学をしまして、アメリカ人が原爆投下をどう思っているかを身近な人に聞いてまわったり、スミソニアンにも行きました。やっぱりそこでは原爆投下は正しかった。それがアメリカ人の命を救ったと言っているところを生で見るとショックを受けたりしました。自分自身で戦跡も毒ガスをつくっていた大久野島に行ってみたりとか、個人的にまわってきたりということを今までもしてきたんですけど、戦後、時間が経って行く中で戦後を生きてきた被爆者の方達、戦争を経験した方たちが高齢化する中で、お話が一人ひとり違うわけで聞くことの大切さを感じるようになって今日も参加させていただきました。今日が第一歩なんですけれども今後も続けていきたいし、出来るかどうかはわからないんですけど広島の伝承者にも興味を持ってしまして、実際に関われるかはわからないんですけどバトンを受け継いでいきたいと思っています。

司会：では、最後に片山さんから。

片山：この年になりますと、広島に国立の施設が出来ましてね。

司会：追悼祈念館。

片山：国立広島原爆死没者追悼平和祈念館ですか。そこから私の書いたものを公開してもいいかの問い合わせがある。こちらは送ったことはないけれど集めている。日野市が出した刊行物とか、そういうものを公開していいかどうか。3年前、急性化膿性胆のう炎で倒れましてね。担ぎ込まれたら80%死ぬという判断だった。生き返ったんですけどね。それが明けたよれよれの時に広島からビデオを撮りに来ましてね。僕は嫌だから見ていないんです。そういうものにもみなさんに目を通して頂ければね。なかなかね、難しい時代になりましたね。

<返送先> 〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F  
ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会  
電話/FAX03-5216-7757 Email: hironaga8689@gmail.com